

第78回麻布獣医学会 一般講演8

イヌを用いた動物介在療法に関する研究 ～広汎性発達障害における試行とその効果～

椛島 大輔¹, 岩橋 和彦², 小方 宗次³,
柏木 理江⁴, 中村 和彦⁵, 太田 光明⁶

¹麻布大学大学院 動物人間関係学研究室, ²麻布大学 環境保健学部教授
³麻布大学 獣医学部助教授, ⁴子供の生活研究所相談部・こぐま学園主任
⁵浜松医科大学 精神神経科講師・外来医長, ⁶麻布大学 獣医学部教授

アスペルガー症候群 (Asperger Syndrome) は広汎性発達障害 (PDD: Pervasive Developmental Disorders) の一型であり, 社会的相互関係の障害, コミュニケーション能力の障害, 反復常同的あるいは執着行動の三徴候が幼少期からみられることによって定義づけられる発達障害である。これらの三徴候によるソーシャルスキル (他者との関係や相互作用のために使われる技術) の欠如が, 学校および社会環境への適応を困難なものとし, 活動への参加や就労の機会を減少させている。これにより直接的あるいは二次的の症状として, 現在および将来の心理的健康や社会的適応に大きな影響を及ぼし, うつ病, 自殺, パラノイア, 全般的な社会的不適切さがみられる。そのためアスペルガー症候群におけるソーシャルスキルの向上は重要な課題となる。

本研究では, アスペルガー症候群における現在および将来の心理的健康や社会的適応の改善方法を明らかにしていくことを目的とし, 犬を用いた動物介

在療法 (Animal Assisted Therapy) を試みた。このAATは医療および心理関係者との相互協力により実施し, ソーシャルスキル, およびそれに伴うQOL (Quality of Life) の向上, 不安・緊張・ストレスの緩和について心理学的, 行動学的側面から評価した。

5症例に対し犬を用いたAATを試みた結果, 3症例において社会的相互関係およびコミュニケーション能力に改善がみられた。また, 表情による感情の表出頻度の増加がみられた。さらに1症例を含む4症例において行動に落ち着きがみられるようになり, 言語を用いて自らの感情を適切に表現することが可能となった。これら4症例ではCBCL (Child Behavior Checklist: 子供の行動チェックリスト) においても同様に改善がみられた。

犬を用いたAATの導入によるソーシャルスキルの向上は, 対人関係の早期構築を図り, これらの治療法における治療効果を促進することが可能であると考えられる。